



『思いやり』のパラドックス

乳児期から「相手の気持ちを考えて」と育てられる日本の子どもが、そのイメージに反して『心の理論』といった社会スキルの獲得が遅いのはなぜか。それを考える前に、心の理論獲得の後押しとなる望ましい大人の対応をお伝えします。まず、言葉が喋れないうちから、子どもの心の動きを、その子に代わって言葉にしてあげること。そして保護者（保育者）自身や子どもの行動を、その背景にある心の動きとつなげて言葉にすることです。

例えば、1歳児が近寄ってきた別の子どもを叩こうとした時は、「叩かない」、「お友達と仲良くね」とは言わず、「急に近くにきたからびっくりしたね。私もびっくりしたよ。でも叩くのはルールに反するからいけません」と穏やかに伝えます。あるいは出勤時に泣いている我が子を見て、「うるさい、静かにして」と言うのではなく、もしかしたら朝の忙しさで命令口調になっているから泣いてしまったのかもと考え、「どうして泣いているの？お父さん（あるいはお母さん）は急いでいるから、きつい言い方になっているんだ。あなたのせいじゃないよ」と自分と子どもの今の感情と、それに連なる

行動を簡潔に言葉で伝えます。こうした方法を日常的にくり返すと、自分の気持ちを言葉にする力がつくだけでなく、他者である保護者の行動やその理由を理解するようになります。そうした習慣が根付けば「近づいてきたから驚いたの？」と聞く保護者に、「ちがう、あの子が意地悪だから」と子どもが言う場合も出てくるでしょうし、「あなたが悪いんじゃない」という保護者に対して、「ちがう、昨日、お友達とケンカしちゃったから行きたくないの」と言う場合もあります。相手の考えが自分と違うと感じ、自分がどう感じているかを理解し、相手の考えや意見に「ちがう」という方法を身につけていくのです。ところが『思いやり』を重要とする日本の文化では、感情や意見の違いを言葉にすること自体が肯定的に受け取られません。当人ではなく周りの他者が『思いやり』を発揮し、意見や感情を推測すべきとされています。思いやりは、あくまで周りの主観的な推測なので外れることが多いですが、思いやりを受ける側の当事者が「まとが外れている、私は望んでいない」と言うことは良しとされません。このような同調圧力は、未就学児の施設でも見受けられます。一人別行動をしている子に対し「みんなは今、なにしてるかな？」と言う。給食を残している子に「残したら、給食の先生がどう思うかな」という声かけをするなどです。こういった声かけは、理想とは真逆の声かけであり、心の理論獲得どころか、「みんなの目」を必要以上に意識する温床となります。未就学児が相手であればこそ、『思いやり』といった主観的観測を大人がせず、感情や要求、考えを伝える言葉を、主語や目的語を明確にしながら伝えることが大切です。自分の考えを『言う』大切さがわかれば、自分とは違う他者の考えや感情を『聞く』大切さも体験します。「他人の気持ちを考えよう」では辿り着けないゴールが、『心の理論』なのです。